

七尾市名誉市民に 故 瓦 氏

～ふるさと七尾市・

能登の振興発展に尽力～



瓦氏は、故益谷秀次元衆議院議員の秘書を経て、昭和47年に衆議院議員に初当選。それ以来、通算12期37年余りにわたり、ふるさと七尾市と能登の振興発展のために尽力されました。国務大臣防衛庁長官、建設大臣などの要職を歴任されるなど国政の中枢で日本の発展にも大きく貢献されました。

また、国の防衛や自衛隊に対する深い識見により、国民の安全を守り、その負託にこたえようと、防衛庁を『省』にする国会議員の会代表として、防衛省への昇格にも尽力されました。

一方、過疎化が進むふるさと七尾市と能登の振興のため、半島振興法延長などの法整備や能登の社会基盤整備に

尽力されました。特に能越自動車道については、国の高規格幹線道路網14,000キロメートル構想に新規追加させるなど、その建設促進に全力を傾注されました。その能越自動車道は平成26年度中に、いよいよ七尾IC（仮称）まで開通する予定となっています。

さらに、能登空港の建設については、建設大臣を務めていた平成9年当時、地方空港の開発が進まない情勢の中、運輸省航空局へ強く働きかけ、平成15年の能登空港開港への扉を開かれました。

能越自動車道整備や能登空港の開港は、三大都市圏と能登を短時間で結び、産業や経済、文化の振興や交流人口の拡大にもつながり、瓦氏の能登地区の社会資本整備に貢献した功績は非常に大きなものがあります。

七尾港整備についても、大型船に対応できる港として、また安全安心な港にするため、水深13mの大田地区大深水岸壁の整備や矢田新地区耐震強化岸壁の整備や、灘浦地区の漁港の整備についても力を注ぎ、七尾港の機能充実や漁業の発展にも尽力されました。

瓦 氏 略歴

●学 歴

昭和35年3月 中央大学法学部卒

●経 歴

昭和47年12月 衆議院議員第33回総選挙初当選
昭和53年12月 労働政務次官（大平 正芳 内閣）
昭和55年7月 内閣官房副長官（鈴木 善幸 内閣）
昭和58年12月 衆議院大蔵委員長
昭和61年1月 衆議院建設委員長
昭和61年7月 自由民主党全国組織委員長
昭和62年11月 国務大臣防衛庁長官（竹下 登 内閣）
平成元年6月 自由民主党副幹事長
平成2年3月 衆議院安全保障特別委員長
平成4年12月 衆議院国会対策委員長
平成7年10月 衆議院政治改革本部本部長
平成8年1月 衆議院安全保障調査会会長
平成9年9月 建設大臣（橋本 龍太郎 第2次改造内閣）
平成11年10月 国務大臣防衛庁長官（小淵 恵三 第2次改造内閣）
平成12年4月 国務大臣防衛庁長官再任（森 喜朗 第2次改造内閣）
平成13年1月 自由民主党公共事業特別委員長
平成14年4月 衆議院武力攻撃事態への対処に関する特別委員長
平成14年10月 衆議院国家基本政策委員長
平成15年11月 自由民主党衆議院議員総会長
平成21年7月 衆議院議員引退
平成21年11月 旭日大綬章受章
平成25年1月 七尾市名誉市民

た。
そして、港と連動するまちなかの賑わいづくりのため、七尾港と七尾駅を結ぶ約700メートルの県道七尾港線を整備する、シンボルロード整備事業の推進にも力を注がれ、平成6年の着工につなげています。商業、文化、交流機能を集積させる事により魅力的な都市空間を形成するシンボルロードは、平成22年に完成し、まちなか活性化と魅力的なまちづくりへとつながっています。

文化財保護についても尽力し、文化庁が実施する史跡整備事業である「ふるさと歴史

の広場」の採択に向けて取り組み、平成元年には、史跡能登国分寺跡の整備に着手することができました。またその年、史跡七尾城跡の顔となる石垣が大規模に崩落した時には、文化庁へ交渉し、速やかな石垣復旧を実現。貴重な文化財の保全にも尽くされました。

このような長年の功績が認められ、瓦氏は、平成21年11月3日、旭日大綬章を受章されています。国政並びに地方自治の発展に貢献されるなど、その輝かしい功績は誠に顕著であり、七尾市民の誇りです。

ひと・ヒト・人

子を想う親の心

今年5月、フランス・パリで行われる2013世界卓球選手権大会に、七尾市出身の松平賢二さん（次男）、松平健太さん（三男）、松平志穂さん（長女）の3兄弟が出場する。3兄弟が同時に代表入りするのは、史上初の快挙。

また、長男の松平敏史さんは京都の高校で卓球のコーチをしている。この卓球兄弟を育ててきた両親に、子どもへの想いを伺う。

松平 道代さん

松平 清志さん

卓球を教えたきっかけは？

私（清志）が卓球をしていたことがきっかけで、スポーツ用品店を創業。店舗の横にあった倉庫を改装し、卓球の練習場を作りました。子ども4人（男3人、女1人）の遊び場は、いつも練習場。長男は保育園から帰ってくる、自宅ではなく、練習場でラケットを握っていました。弟や妹たちも長男の姿を見ていたので、自然と卓球をするようになったのではないかと思います。

しかし、子どもたちには卓球を無理矢理押しつけた訳ではなく、町内行事などでは他のスポーツも勧めていました。おもしろがって毎日卓球マシーンで遊んでいたことが、結果的に卓球を続ける一番の理由になったのかなと思います。

どんな育て方をされてきましたか？

子どもたちを、小さい頃から厳しく育て、宿題が終わってから卓球をさせていました。ただ、親としては、卓球の基礎を教えただけで、それ以上のことは、子どもたちが自分で考えていたのだと思います。子どもたち自身がスポーツの辛さを乗り越えて、成長してくれることを願うばかりでした。

また、家族全員で必ず食事をする、ただけは欠かしませんでした。どんなに仕事が忙しくて帰宅が夜10時を過ぎ

ても、祖父母、子どもの8人で一緒に食事をしていました。卓球以外の話題も多くて、家族で楽しく話していたことを覚えています。

子どもが成長した姿を見て今思うことは

卓球が強くなるために、子どもたちは、中学校や高校から七尾を離れて県外の学校へ進学しました。子どもが目標に向かってがんばっている姿を見て応援しようと思い、送り出しました。今でも自宅の卓球教室に通って来る生徒たちがたくさんいるので、ある意味自分の子どもを育てているような気持ちで、接しています。

卓球以外では、あいさつや礼儀など、日常生活での基礎はしっかり教え込んだつもりです。その甲斐があつてか、道具を大切にしたり、靴をそろえたりすることが、当たり前に行えるようになったようです。

私たちが気づかないうちに、他人への目配りや気配りもできるようになっていたことが、親として本当にうれしかったですね。

子どもたちへ

天狗にならず、お世話になった人たちに、常に感謝の気持ちを忘れないでください。自分の人生は自分で切り開くもの。相談があれば、いつでもアドバイスはしますよ。